



慶應義塾大学ビジネス・スクール

介護分野の制度設計

5

幅広い選択肢の準備と決意に基づく選択

高齢者のさらなる長寿化

10

日本のみならずどの経済的先進国でも、まず 20 世紀前半に公衆衛生の発達と栄養水準向上により子どもの死亡率が劇的に低下しました【図 1】。続いて抗生物質の発見・利用によって結核が一応のところ克服されると若年世代の死亡率が減り、続いて高齢者の死亡率も 20 世紀後半に急速に下がっていきました。今では史上空前の数の元気高齢者が存在します。

わが国において最近 50 年超の間に高齢者の死亡率がどのくらい低下したか。女性の数値を取り上げます^[1]。1960 年と比べると、2015 年までの間に年間死亡率は、65 歳から 74 歳では 5 分の 1 に激減しました【図 2】。もし、治療方法の発見や進化が功を奏し、ある疾患の年間死亡患者数が 3 割減つたら、それは素晴らしい成果と言ってよいでしょう。ところが、この 55 年間に起きた 65-74 歳の年間死亡率は 3 割どころか、8 割減、つまり 5 分の 1 まで減りました。何と 90 歳代でも 2 分の 1 になっています。

このように、「すべての年齢階層で高齢者が 1 年間に亡くなる率が著しく減った」事実は間違いない。医療利用の普及、健康行動の広がりなどにより、高齢者のさらなる長寿化が当たり前となりました。ただし、すべての人が病気になってもそこから回復し、人生の終末期近くまで元気とは言えないこともまた事実です。だから、高齢者の長寿化は手放しでめでたい変化かと問われても、即答は難しい。

15

20

25

[1] 男性数値の傾向もほぼ同じです

本ケースは、埼玉県立大学理事長・慶應義塾大学名誉教授 田中 滋がクラス討議の参考のために作成したものである。本ケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学ビジネス・スクールまで（〒 223-8526 神奈川県横浜市港北区日吉 4 丁目 1 番 1 号、電話 045-564-2444、e-mail:case@kbs.keio.ac.jp）。慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、いかなる部分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またいかなる方法（電子的、機械的、写真複写、録音・録画、その他種類を問わない）による伝送も、これを禁ずる。ケースの購入は <http://www.bookpark.ne.jp/kbs/> から。

30